

白描

明石海人

目次

第一部 白描

診断

紫雲英野

島の療養所

幾山河

恵の鐘

鬼豆

春夏秋冬

失明

おもかげ

不自由者寮

杖

音

白粥

夜 天 斜 面 寂 星 宿 砌 軌 跡 奈 落 鏜 牙 巷 年 輪 譚 昼 遲 日

翳 暁

跋 内田守人
作者の言葉

第一部 白描

診断の日

病名を癩と聞きつつ暫しは己が上とも覚えぬ

医師の眼の穩おだしきを趁おふ窓の空消え光つつ花の散り交ふ

そむけたる医師の眼をにくみつつうべんひ難きこころ昂ぶる

言こともなく昇永水に手を洗ふ医師のけはひに眼をあげがたし

看護婦のなぐさめ言つも聞きあへぬいかり忿にも似るこの侘しさを

診断をうべなひがたくまかりつつ扉に白き把ノブ子をば忌む

踏む階きだのいたき磨耗へりにも思ほゆる子等は眠氣にむづかる頃か

雲母きりらひかる大学病院の門を出でて癩墮かたあちし身の影をぞ踏む

診断を今はうたがはず春まひる癩かたあに墮おちし身の影を踏む

行楽の人に群れて上野の山に来つれどまた行くべき方もなく、人なき処をもとめて博物館の広庭をさまよふ

在るまじき命を愛をしくうちまもる噴水ふきみづの水は照り崩れつつ

七宝の太花がめのをき肌夕かけりくるしづけさを冷ゆ

人間のルイを逐はれて今日を見る狙そ仙人せんが猿のむげなる清さ

天窓のあかりは高くひそまれる陳列室にひとりゐがたし

おろそかに三つつ過ぐれどマンモスの化石の牙は彎まがりたくまし

日暮れて博物館の門を後に、さる夜の夢などをたどる如く一足毎に重る心は踏みゆく石塊の一つ一つにもよるべなき愛着を覚えつつ

あるときは世ののぞみをも思ひてし府立美術館の石壁は黄に

身一つのあらましごとぞ消けなば消けね消ぬべくもあらぬ妻子めこが縁えじは

銅像の西郷公は紙つぶてあまた著けたり素足の甲にも

霧らひつつ入る日の涯はありわかぬ家並を罩めて灯りそめたり

陸橋を揺り過ぐる夜の汽車幾つ死したくもなく我の佇む

洗面所の鏡にうつる影は昨日に異ならねど、病み頹るる日のさまを思へば、我身ながら己にこの世のものとも覚えぬ。や
がて灯かけ暗き車室の一隅に外套の襟を立てて

今日一日の靴のよごれをうちまもる三等室に身は疲れたり

子等を妻を木槿年古る母が門を一目欲りつつ帰りにけり

待てる家妻に言ふべかるあまたはあれど一言にわが癩を告ぐ

妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその声を聞く

うから皆我を嘆かふ室を出て子等の笑まひにたくひてあそぶ

ありし日は我こそ人をうとみしかその天刑を今ぞ身に疾む

その後

職を罷め籠る日ごとを幼等はおのもおのみに我に親しむ

愛垂るる子を離れきてむなしさよ庭籠の餌栗の殻を吹きつつ

生立ちて清なかりしと我を見むその遥かなる遷ろひをおもふ

癩わが命を惜しむ明暮を子等がえまひの敵しくもあるか

家を棄てて

その前夜

咳くは父が声なりかかかるさへ限りなる世のわが家にふかむ

駅のまへえのきの梢にこの暁をここだく群れて鴉はさわぐ

幾たびを術なき便りはものすらむ今日を別れの妻が手をとるも

さらばとてむづがる吾子^{あこ}をあやしつつつくる笑顔に妻を泣かしむ

鉄橋へかかる車室のとどろきに憚らず呼ぶ妻子がその名は

昨夜^{きぞ}の夜を母がつけたる鮎の鮎のほふ包は網棚に置きぬ

窓の外はなじみなき山の相^{すがた}となり眼をふせて切符に見入りぬ

かのあたり兄が夫婦の住居なる夜汽車にあるが儘なる身を横たへぬ

ゆき交ふや夜汽車の間にたまゆらを向ひ車室^{あかり}の灯はなやぐ

紫雲英野

鬼齒朶

南紀のさる温泉にて療養中、失踪せる同宿の乙吉なる若者裏山の奥にて日を経て発見せらる

乙吉がむくろは臭ふ草の上に袷の縞の眼にはたちつつ

遺のこされし眼鏡に翳をおとしつつあを雲の空高くひそまる

とりとめて書き遺すこともなかりけむ手帖にうすき鉛筆のあと

齒朶わか葉夕づく岨そびを帰りつつ山蟹のつめ朱なるを見たり

紫雲英野

紀州粉河の近在に独居して病を養ふうち、たまたま子の訃に接す。事過ぎて既に旬日の後なり

巳すてにして葬はふりのことも済めりとか父なる我にかかはりもなく

白飯しろいひを器に盛りてあたらしき箸は立てつつ歎き足らはず

昼こそは雲雀もあがれ日も霞め野なかの家の暮れて幽かそけさ

幾年をはなれ棲みつつうつそみのいまは知らで罷まがり果てしむ

ながらへて癩かたゑの我や己が子の死しゆくをだに肯うべなはむとす

世の常の父子おやこなりせばこころゆく歎なげきはあらむかかる際きはにも

幾たびをよしと凶わるしと惧おそれてし世の夢さへや過ぎはてにけり

更くる夜の壁も畳も灯のいろもただしらじらと我をあざむく

幸さいちうつく生まれて死にてちちのみの父にすらだに諦あきらめられつ

あが児はもむなしかりけり明けさるや紫雲げんげ英花野に声は充つるを

うは温ぬるむ水み泥どろがなかに縞ま赤あかき蚯み蚓ずの仔こらの生あれてうごめく

紫雲英咲く紀の国原の揚雲雀はかなきことは思ひわすれむ

花散るや双なぶ仁王にわの朱あけのさび今日の一日を暮あれなづみつつ（粉河寺にて）

萌えいづる銀杏いてふの大木おほき夕ゆづきて灯ともりたまふ鬼子母きこぼ観音

七七忌の日

童わが茅花^{つばな}ぬきてし墓どころをのかの丘にねむる汝^{いまし}か

ふるさとの家に帰らば今のかも会はるる如き思ひ歇まず

帰省

各地の療院を輾々とすること数年、癒ゆべき望みも失せて帰郷

斯^{おひた}もこそ生立ちにけれ置きて去にしそのかの吾子^{あこ}かやこの羞む^{はにか}は

年を経て帰る我家に手童^{たわらは}の父とは呼べどしたしまずけり

留守の間をみまかりし子の位牌に、享年二歳とあるも儻く、尋常なる礼拝のわざなど心に染まねば、黙然と踵をかへすを母の咎めて、「墓参もかなふまじ、いとせめて香などけよ。」と云ひ給ふに

逢見ずて過ぎし位牌に香をたくかかるを我の生れしめてき

縁側の隅の柱に、嘗て手馴れたりし空気銃の金具もいたく錆びたるが逆さまにつるされたり。「雀の執念なるべし。」など母の真顔にいひ給ひけるは、我が癩の診断を受けし頃なりき

縁側の壁に彫られし落書きも古りし我家に帰り来にけり

家妻と茶を汲みをれば年を経て帰り来たりし我家ともなき

夕経の持仏にむかふ老さくの父が頸はおとろへにけり

日を経る儘になじみそめたる子はお八つの菓子等を頒ちつつ

ふたたびを訪ひてよとねもごろにわが童は我をもてなす

週日の後国立の療養所に向ふ。この度は帰り見む日もはかり難ければと、妻は子を伴ひて停車場まで見送る

母父に手をとられつつ興じやまぬこの幼きを別れゆかむとす

島の療養所

納骨堂

椿咲く島の御堂の朝たけてせりもちにさす翳のしづかさ

置く露のつめたきばかりこの朝のつばき白花もの寂びにけり

朝瀉をわたり来りてきりぎしに声築く石のきざはしを仰ぐ（長島神社にて）

医局

ついたての白布のかげに牡丹の花朱あけにひそまる内科室の午後

外科室のがらす戸棚にうつりつつ書をひそかに雲のゆきかふ

蔦わか葉陽に透く朝を窓ぎはの試視力表はほのかに青む

はなし超えしまらく超えて吸入の湯けむりの音とみにさやけし

父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に棲むべくは来ぬ

大楓子油

大楓子油は唯一の治療剤として、週に三回の注射を行ふ

癒えがてぬ病を守りて今日もかも黄なる油をししむらに射つ

注射針の秀尖のあたりふくれゆく己が膚をまじまじと見る

さる手術に

目かくしの布おほふとき看護婦の眼鏡の玉に見えし青き空

白嬰栗

白嬰栗を嚙には挿せど病み重る友の瞳にうごくものなし

ほのかに尿のほひしづみつつ重病室にながき日暮れぬ

蚊帳ごしの灯にかけをふかめつつ友が寝顔はおとろへにけり

おのづから遁るるときおもひもて重病室の廊を帰来

骨壺

病棟の夕さざめきをとる灯に死しゆくさへや逐はるごとし

眷族^{うから}など来り看護^{みと}らふ者もなく臨終^{いまま}の際^{きは}に遺すこともなし

穿てども咽喉の爛れの夜な夜なを もがきつくして死にゆきにけり

いやはてに面をおほふ白木綿^{しろゆふ}はまなこに沁みてあたらしきかも

亡骸^{なきがら}をおくり来りて月あかき解剖室に讚美歌をうたふ

この朝を友豊彦が骨あげの笛吹きならず山の火葬場^{やきば}に

繰返す聖歌ながらに手向けゆく黄なるコスモスは柩の上に

小包に送らるるてふ豊彦が遺骨の壺はちひさかりけり

静養病棟

石壁のかこむ空地の昼の空たまたま松の花がらの降る

洗面器の昇永水は紅褪せてさかしまにうつれる三角のそら

狂ひたる妻をみとりて付添夫となりし男は去年を死したり

石壁は肌あらし尋め来つるこの島の院にきちがひも棲む

監房に罵りわらふもの狂ひ夜深く醒めてその声を聴く

盆踊り

いちように朱の花笠ひるがへす盆の踊りのはなやぎ寂し

大きな踊り花笠もてあますをさな女童の手ぶりは愛し

見のこして盆の踊りを帰り来る渚の路に水鶏鳴きしく

追悼

看護婦奥山姉を偲びて

八木節の囃子^{はやし}かなしく舞ひし夜の衣^{きぬ}の綾さへ眼には残るを

大楓子油注射のときを近づきて口覆^{マスク}の上に黒む瞳^めなりし

補助看護

重病等には付添夫あれど、徹夜の看護を要するものには、島人の全員半夜づつ交代にてこれに当る

交代の言葉を言へば目をあげて看護^{みと}らるる人も我を見まもる

相知らぬ我に一夜をみとらるる人の眼蓋^まび皺^もだちを見守る

壁の上に時計の音はうすれつつしまらく我のねむりたるらし

窓の空しらみそめたり藤棚も海面の明りもおぼろおぼろに

補助看護の一夜^{ひとよ}は明けて枕辺のスタンドの灯の黄ばめるを消す

夜すがらの看護を了へて降りたてば壁の葛の露のしづけさ

病める友

日々の主食は麦飯なれば、祝祭日に給与さるる「白飯」は島人の珍重するところ、或はお萩海苔巻など相応の趣向を加へて賞美す。白飯の他の馳走は小豆を煮潰して作れる田舎汁粉にして、会食饗応はもとより、三々九度も之に祝ふ

かたゐ等は家さへ名さへむなしけれ白米の飯を珍しらに食む

島の院の祝言の宴に招かれてをとこをみなの性をさびしむ

x

帰省の日間近き友とむかひつつ灯^{あかり}ともして夕の飯食^{いひを}す

消灯ののちのしましを友が語る墓廟^{シムゴ}のこと巫女^{ユタ}の婆のこと

註 シンデユ、ユタはいづれも琉球の言、ユタとは口寄せ、呪などを行ふ女のこと。蛇女の漢字は意味によって仮に当てたもの。

ある人に

事すぎて良しと悪しわると罵れど時にあたりて身は捨てがたし

ソクラテスは毒をあふぎぬよき人の果は昔かくしありけり

×

面会の父なる人にあらたまる若き室人へやびとの言ことを聞きをり

癩に住む島の作業に木を植ゑて安らぐ人の言にしたしむ

×

まともなる問答ものうく神憑かかりの翁が言の合間をうなづく

八百万の神々己に憑つくなすこのかたくなは侮り難し

父の訃

文殻をたたみ納めてしまらくの思ひはむなし歎くともなく

白ふぢの鉢のまへにて言はしける別れ来し日の父が眼まなざし

送り来し父が形見の綿ごろもさながらにして合うがすべなさ

今日の訃の父に涙はながれつつこの悲しみのひたむきならぬ

父ゆゑに臨終しまはのきはもの言ひに癩かたゑの我を呼び給ひけむ

青蜜柑剥きつつ思ふ叱られて幾たび我の父をうとみし

盆栽の蜘蛛をとらへて傍へなる軍鶏しやもにあたへき太き指なりき

面会

隅々たまたまを遭ひ見る兄が在りし日の父さんからのもの言ひざま

事ごとに我の言葉をさからはずたまたま会へば兄の寂しさ

面会の兄と語らふ朝なぎを青葦むらに波のたゆたふ

うすら日の坂の上にて見送れば靴の白きが遠ざかりゆく

夕あかる室の空しさ帰り去にし我兄の声は耳にのこりつつ

音たてて はたはた ひとつ飛びにけりあれぢののぎくおどろがなかを

朝日トーカーニュース

ゆくりなく映画に見ればふるさとの海に十年のうつろひはなし

兄も弟もひねもす呆けし潮あそび日焦童の頃の恋ほしさ

遠泳にめぐり疲れしかの島に光くだくる白波が見ゆ

我のごとわが子も遊べ飛の魚のかの瀬の鼻を翔くるはあらむ

かの浦の木もく槿花咲く母が門とを夢ならなくに訪はむ日もがな

写真

井戸端の梅の古木に干されたる飯櫃おひつも見ゆれわが家の写真に

吾子あこが佇たつ写真の庭の垣の返に金柑の木は大きくなりぬ

ありし日を父が愛めでにし金糸雀かなりやは飼ひ遣されて今も鳴くとか

恵の鐘

恵の日に

皇太后陛下の御仁徳を偲び奉りて

そのかみの悲田施薬のおん后いまを坐ますがにをろがみ奉まる

みめぐみは言はまくかしこ日の本の癩射に生あれて我悔ゆるなし

恵の鐘

鐘銘には皇太后陛下の賜へる

つれづれの友となりてもなぐさめよゆくこと難き我にかはりて

の御歌を刻み奉る。昭和十一年十一月二十日撞初式を行ひ、爾来明六つ暮六つの鐘は日毎に長き余韻を島里に曳く

唱和する癩者一千島山にめぐみの鐘は鳴りいでにけり

今日よりぞ明暮に鳴る鐘の声日毎日ごとの思ひには聴かむ

鬼豆

木魚

去る年の秋石井漢氏来園せらる。氏は木魚の音を愛でて屢々伴奏に用ひ、時に自ら之を拍つて門弟の踊るに和す

踊手に木魚打ちつつ見入る漠のまなこの光喰ひ入ることし

点光に影をみだして踊る漠の素肌の胸を汗はしたたる

芝居

患者にて組織せる劇団を愛生座と呼び、春秋二回の芝居日には近村よりの来園者に賑ふ

喜多八が関西訛りに啖呵をきる癩療養所の芝居たぬしも

会堂の宵のぬくとさ飛びありく童の声も憎からなくに

除夜

年^ほぎのよそほひもなく島の院に百八つの鐘にただ静かなり

島山の鐘の撞木の文^{たけ}ながの綱手の垂れに朝は凧ぎつつ

元日をきたる年賀の文ふたつうちのひとつはふるさとの子より

追羽子の音もあらず元日のこと静けさをひとり籠らふ

宵の間の疾風は落ちて枯庭に霜は降るらし月かげり来に

砂浜にむしりすてたる白き羽毛のしづけさ深し陰冷えつつ

鬼豆

春未だ木草は萌えず寂び寂びと葉枯れ齒朶山日にしらみたり

縁あかきランプの笠も母が声も熬る鬼豆の香に匂ひつつ

沈丁花

三浦環女史を迎へて

きざしくる熱に堪えへつつこれやかか環が声を息つめて聴く

沈丁のつばみ久しき島の院に「お蝶夫人」のうたをかなしむ

春夏秋冬

裏山の齒朶のつもり葉ふふませて昨日も今日も雨のけむらふ

転まろびある枯齒朶山の日だまりに近づく声は大瑠璃るりのたぐひか

鳶二つ舞ひもつれつつ草丘に昼の陽あしはうつるともなし

うつらうつら眼まなした下海うみに照り翳る春日のうつろひ見つつ遙けき

海寄うみやの風に堪えへつつ閑しづかなりさくら一むら昼をかがよふ

坂道をくだり来つれば薔薇苑は香に籠りつつうすら日の照る

いつしかもミシンの音はやみてをり立藤のはな黄なる曇りに

いたむ眼を思ひつつ来る温室に護謨の芽だちの紅あはあはし

簞かそを洩るる陽縞うすれて幽かそけさや朱あけの牡丹の花びら寄りあふ

花びらの白く散りしき牡丹の影一むらにほふ夕日のながき

柿わか葉一日ののびの夕あかり湯屋の廂に羽虫は群れつつ

ヒヤシンス香にたつ宵は幽かなり眼のいたみさへ夢に入りつつ

囀りのこゑはあかるき板縁に猫かのこせる昨夜の足あと

暮春

帰り来て人の語るは死に顔に刷きし化粧の清かりしこと

骨あげにしばし間のあり火葬場の牡丹ざくらに蜂は群れるる

訪へな日暮るる縁に佇みて友はしまらく亡き妻を言ふ

松籟

内務省衛生局予防課長として、歌集「銀の芽」の歌人として我等に親しき高野六郎氏、「患の鐘を撞きに」と来園せらる

「屎尿屁」の筆のすさびに親しもよ課長の大人は厳しかれど

客人の撞き給ふらむ高鳴るや鐘の響きはほがらほがらに

泰山木

鹿児島県星塚敬愛園長林文雄先生の御慶事に――新夫人大西ふみ子先生は曾てこの島の医官たりき

しら花のたいざん木は露ながら空のふかきに冴えあかりつつ

樂生病院以来病める我等の第二の母として喜びをも悲しみをも頷ち給ふ人に

いつの日かわが臨終は見給はむ母とたのみつつこの人に頼る

波

きりぎしの坂を越ゆれば松の秀ほにうねりは潤ひるき真昼あを瀟

梅雨霽れの岸边をさして沖つ浪崩れつ湧きつひた寄りに寄る

登りきて見放さくる沖のかくり岩さうねりうねりを見えて泡だつ

夏至

演習のやがてはじまる松山に夏うぐひすの声しづかなり

萌えいづる榎むろの白芽に降る雨は匂ひあたらし音ねのあかりつつ

x

暮れのこる土の乾きに甘藍は鉛のごとく葉を垂らしたり

夕焼けの雨にならしひとときを さきに鳴く一つ青がへる

厠戸のひらき重たく降る雨のやみ間を黄ばむ夕空あかり

夕まけて芭蕉わか葉にやむ雨は砌みぎりの石に乾き

盛夏

番法あんぽんの湯をすてしかば窓下の日陰の土を蠅むしの群だつ

たてこめて茵しとねにほふ暮々を募る暴風雨あらしに蠅あしひとつつ飛ぶ

風鳴りは向ひ木立にうすれつつ々々を鳶とびのこゑ啼いでぬ

立秋

庭先にさかりの朱あけをうとみたる松葉牡丹はうらがれそめぬ

揉む瓜のにほひうすらに厨返は秋立つ今日を片かげり来ぬ

白楊の梢にたかきうるこ雲夕あかりつつうすれゆくなり

×

夕風ぐや眼まな下した瀉がたにしづむ日の光みだして白魚はくぎよ跳びしく

あかあかと海に落ちゆく日の光みぢかき歌はうたひかねたり

秋

煙突の黄なる鉾石船ひとるゐて起重機のおと朝漉に鳴る

地ならしの丹土の下に秋草の萩も桔梗も埋もれてゆきぬ

紙うらに滲みてかわく墨のあと深夜をもののは声は絶えつつ

暮れおちて冷えさし来るひむがしの窓をまともに月さしのぼる

拍手

園長光田健輔専制の還暦祝賀会に

緋の頭巾の陣羽織童めく園長におくる拍手ひとしきり

ひたすらに癩者療救の四十年わが園長の今日をたふとむ

楽

隣舎より聞こえる放送の調べを縁に出でて聴きつつ

ことごとく夜天の星はまじろがずエルマンが絃高鳴りわたる

人間が鳴らす音色のかくばかりかなしかる夜を星はひそまる

ベートーベンの第九交響曲を聴きつつ

うつそ身は聴き澄しつこの楽の鳴りかはす間も尿かもすを

死しゆかむ夜のかくもこそがつ諸シムフォニイやみて遙かに月いろのさす

姪

こえの世を短き命ひたぶるに聴いくもこそ汝の生きしか

汝が描きしうろくづの絵に白菊のまだきを剪りてはるかに悼む

蟋蟀

一夜高熱を発し、後、数日の昏睡の間を、現れては消えし幻影の幾つ

更くる夜の大気ましろき石となり石いよよ白く我を死なしむ

天井の白きにひろがる雨もりを妻子眷族のよりてなげかふ

しんしんと振る鐸音に我を繞りわが眷族うからみな逐はれて走る

煉瓦塀高くめぐらす街角に声あり逃げよ逃げよといだなふ

息つめてぢゃけんぼんを争ひき何かは知らぬ爪もなき手と

線ちかへし我の齡よはひをかぞへみる壁のむかうの声ならぬこゑ

身一つの置き換へらするおそれより己が名を彫る壁にのぶかに

柱時計三時をさして日のあたり厨の音はもの刻むらし

死にかはり生まれかはりて見し夢の幾夜を風の吹きやまざりし

かつてなき光なり朝の空の晴れ幾日幾夜の昏睡を覚めぬ

床下に一つゐて鳴くこほろぎの声のまにまに死にかはり来ぬ

冬

見慣れたる電信柱たふされて窓さきの空今朝を冬めく

前栽に菊菜つみつこの頃をおこたる母への便りをおもふ

日あたりの病舎の縁にひびきつつ午後の作業は石を研るらし

門さきに冬木の影のしづかなる入日のなかを帰り来にけり

陽あたりは移りつくして紙障子ほの青みつつ冷えのさしそふ

サンルームの壁に斜めに日のうすれ夕べはさむしものの焦げつつ

x

降りいづる雨あし暗き日の暮れを相撲放送の声あわただし

図書室の灯は高く更くる夜の玻璃戸の闇を氷雨降りつぐ

壺網

我室の窓の下十歩にして海なり。涯は六合を繞る潮も、この島の入江ふかく入り来たりては、海をよりは池なり、池よりは泉水なり。しかも、四季昼夜のわかちなく漁師等来ちすなごる。或はささやかなる発動機船を動かし来りて、ひの如く張りめぐらせる壺網てふを揚げ、夜の間を迷ひ入りし小魚の末をまで漁りつくす

海よりに舷ふなはたたたく音さむしこの夜のふけに何を獲るとか

む衾しにすまかづき臥す夜を蟹あまの子はすこやかなれやすなごり叫おらぶ

この朝も石油の料しろうに足らずよと芥のごときを舟に投げこむ

なりはひの険しきを言ふ蟹あまの老つくづくと見て我われ儕らを羨としむ

失明

夜盲症

遠からぬ路べりの灯の見えわかず鳥目といふも身の衰へか

消えのこる肝油の臭ひは悪^{にく}めども鳥目すらだに癒え易からぬ

角膜炎

角膜の白濁次第に募れば、軟膏塗布も結膜下注射も瞳孔切開も角膜剝離の手術もすべて甲斐なく

近づきてその人ならずおろそかに向けしゑまひの冷えゆく暫し

盲^あひくれば人の顔色の弁^わきがてに或^{ある}はよしなき物言ひもしつ

角膜の濁りはすでに披きつつアルバムにさへ親しみがてぬ

降る雨の日暮れはさむしあはあはと壁のよごれに灯は滲みつつ

暗室

ふかぶかたとざす眼科の暗室に朝は炭水のにほひ籠らふ

照明の光の圏にメスをとる女医の指おまひのまるきを見たり

眼神経痛

しづかなる友の寢息やいつしかも盗汗ねあせの衣きぬの更ふべくはなりぬ

更へなづむ盗汗の衣にこの真夜を恋へば遙けしははその母は

夜すがらの眼のいたみをまもりきて暁はやき囁りを聞く

まじまじとこの眼に吾子を見たりけり薬に眠る朝のひととき

おぼろかに器の飯の白く見えてをだやむいたみに朝を過すくしぬ

聴診器のややに冷たき肌ざはりたまたま障子に陽の明り来ぬ

失明

眼神経痛頻に至る。旬日の後眼帯をはづせば己に視力なし

払へども払へども去らぬ眼のくもり物言ひさして声を呑みたり

くもる眼をみはりつ瞑ぢつ真心ひたしこころやうやくにして黙居もだゐに堪えず

いつをかはこの眼の明りの還るべく思ひたのみて因被しゝおほかづきぬ

眼帯にやがてぬるむあぶら薬かくてぞ我の盲しひはてぬらむ

昼も夜も疼きつくしてうつそ身のまなこ二つは盲しひ果てにけり

眼も鼻も潰つぶえ失うせたる身の果てにしみるきて鳴くはなにの虫ぞも

また

我のみや癩しに盲しふるにあらねどもみはる眼にうつるものなし

幾人の友すでに盲しひいまは我おなじ運命さだめを堪へゆかむとす

慎れこそひさしかりしか盲めひての今朝はしづけき囁ささりを聴く

ひとりなる思ひに耽る眼のあらば妻への便はものさむ夜をよ

おもかげ

鳶の輪

下村甲海南先生を迎えて

首あげて盲の我のうちまもるおん顔と思ふ声のあたりを

しまらくも都の風ふうりは忘れませ鳶鳴く島に昼のながきを

消息

時々の遷りかはりを細々と報せくる母が便り。猫板に巻紙を展べて書かすらむ姿の目にかみては、仮名文字の一つ一つ金泥の経文にもまさり、盲ひ来りては傍ら人の匆卒に読みさる一字一句にもしろがねの鉄もて打たるごとく、父の訃、兄の病、子の生ひ立ち、さては庭の葡萄の実りまで、喜びも悲しみもやがて声なき嘆息の幾たび。絶えて、久しければ胸さわぎ、披きては其の後をうち案じ、いづれも歎きならぬはなし

をりをりを思ひいでつつ見えぬ眼に母への便りを今日も怠る

音信おとづれの今日はありたり老おいらくの母が言葉はながからねども

亡き父が三めぐりの日の落雁も母より届く小包のなかに

友が言ふあや目を眼にはうかめつつ母より届ける衣きぬを被かきぬ

この頃を便り遠のく兄が家はつつがなきらし金糸雀かなりやどちも

おもひで

秋雨の昼をこもりて抽斗ひきだしにふるき象棋しよぎのこまも見いでぬ

天井に洋灯の灯かけ円くさしわが弟は生あれぬたりけり

その翌あけの弟いろとが頬のはからざる冷たみを吾がひとり畏れぬ（弟急死す）

余のことの覚えはあらね棺をとちて泣きたまふ母を父の咎めし

石の面に彫れば冷たき弟が名やわが世の翳ぞかくも兆しし

弟が死にゆく夜をねむり呆けし我をある日の母は言はしつ

さ庭なる核なし柑子のよき熟れは母が昨日の便りにありき

茶器棚のけやき戸の理のみだれさへ母を憶へばつばらつばらに

面会に来むとのたまふ老母を道の遠きに我いなみたり

仏（その一）

病む我に逢ひたき吾子を詮なぐる母が便りは老い給ひけり

遡る記憶のはてにむなしかる父我ならし逢ひたかるべし

目にのこる影はをさなし離り住む十年の伸びは思ひみがたし

父我の癩を病むとは言ひがてぬこの偽りの久しくもあるか

すこやかに育てばまして歎かるる幼き命わが血をぞ曳く

思ひ出の苦しきをきは声にいでて子等が名を呼ぶわがつけし名を

天刑とこれをこそ呼べ身ひとつにあまる疫を吾が子に虞る

歌がるた

夕はやき臥床にをれば 松のうち今宵かざりと

隣間に遊ぶ歌がるた「久方の光のどけき春の日に」読む声も拾う声も ほればれと興じさざめく 源平合戦坊主めぐりと
ありし陽は我も遊びき 熱に臥す夕くらがり 盲ひし眼を見ひらきをれば 歌がるた歌のあまたの 歎きさへ いにし
へ人のめでたかりにし

会遊

ひとしきり跳ぶや海豚のひかりつつ朝は凧ぎたるまんまるの海

揺れやまぬ櫓の秀に掃かれつつひときは明るきは何の星かも

×

大陸の彼処にをはる夕あかね古りし砦は海の涯にみゆ

×

富士が根の萱生高原うちわたす空の涯より尻つぐわたる

国二つ此処に分るるすすき原蛇干す家村を覆ふ空の蒼

かへり見る檜原の涯のひとところ山中湖うみは暮れのこりつつ

×

あまねかるその名はあれど古への彫師が遣す猫のさびしさ（日光）

滝壺は霧しづきつつ轟けり踏まゆる巖根もとどろとどろに

滝つぼ路還り来つれば日のひかり白樺むらは筒鳥のこゑ

×

アカシヤの並木花咲く夕よひばかり古ふるき駅えきのかなしきはなし（紀州粉河）

河はらに白しろき傘干す冬ふゆ日ひざし堰せきの網代あじろは曝さられ乾かわきつつ

仏（その二）

別わかれ来きて十年じゅうねんにあまるこの頃ころを妻つまがたよりはかたじけなしも

朝あさ粥あじのうすきにほひに思おもほゆるひさしき年としを離わかれ棲すまみにけり

あらぬ世よに生なれあはせてをみな子の一ひと生とよの命いのちをくたし棄すてしむ

地ぢ獄ごくにも墮おちなば墮おちね我われ為ために孤ひとりをまもるをみな子は愛をし

癩しかすでに盲くらひつくしたるおとろへに妻つまをしおもふ居ゐむかふがにも

糊く口くちのその日ひその日ひにわが知らぬ小こ皺しわもさして孀あぢまさぶらむ

人ひとづてにものす便べんりは吾あぢま妻つまにもただ健たけかにゐよとのみこと

梨の實の青き野徑にあそびてしその翌あけの日を別れ来にけり
子をもりて終らむといふ妻が言身にはしみつつ慰まなくに
健とけきをの子の階ともにあり経へよと言はるるもまた寂しからまし

不自由者寮

転居

入園以来六年を過したる室を出て、不自由者寮に入る
転室の挨拶をかはすこの人と壁をへだてて幾年なりけむ
父の訃はここに読みけり夕はやき窓を開けば水く鶏ひ遠鴨鳴く
引越しの荷物もちだす縁さきに盲の我はとりのこされぬ

手伝人わが事のごと振舞へりをかしきようにて笑ひ難しも

手さぐれば壁にのこれる掛鏡この室にして我盲^めひけり

慰問品

盲人その他起居の自由を欠くものを不自由者と呼び、付添夫をして衣食の用を弁ぜしむ。付添夫も病舎にして軽症のもの之に当たる。不自由者には月々慰問の品を給与せらる。

不自由者となりはてぬれば己が名に慰問の餅も届けられたり

手にのせて重りごろもわりなけれわが名にいただく経木包は

齒にしみて慰問の餅の冷えなすも不惑には至らぬ命なるべし

世の中のいちばん不幸な人間より幾人目位にならむ我儕^{われら}か

己にはさまで不運ならにかに思ひてゐるも不自由者我は

立春

降りたちてなじまぬ下駄のおもみにも籠れる冬は久しかりにし

友が読む書を聴きつつあぐらゐの寒くもなれば茵しとねに帰る

鳴き交わすこゑ聴きをれば雀らの一つ一つが別のこと言う

日あたりの暖かからし雀一羽窓さきに居ていつまでも鳴く

やむ雨の宵あたたかし前栽の冬菜はやがて薑たうにたつべし

雨一日訪ふ人もなく夕暮れて埒ねぐいすずめは鳴きひそまりぬ

縁にゐて夕べはどよむもの音の寒からぬほどの春にぞありける

晩春

目ざむればほのかに明き室のなかたまたま昨夜よべはよく眠りたり

簷^{のき}さきに声けたたましこの朝を雀らの世に事のあるらし

暮六つの鳴りて間のある空明りおこたりひさしき浴^{ゆあみ}思ほゆ

熱に臥^ねす面^{おも}にまつはる蠅ありて夕餉ののりの明りひさしも

臥^ねてをればひびきは遠き船の笛かかる夕べの幾たびなりけむ

夫婦舎に移れる友に贈らなむ花がめの肌に手を触れてをり

五月雨

放送の予報ものうく葉ざくらの日本^{にっぽん}ぢゆうに降る雨ならし

今をある運^{さだめ}命は知らず努めしをあだなりしとはつひに思はず

入学試験合格の日の空のいろこのごろにして眼には涙えつつ

前裁につぎて色づく枇杷いちご聞きつつ母の便りたぬしも

粽

紙鳶の糸のもつれに苛いらつ 我の掌てに 蒸しなすや粽ちまき賜たびにし とある日の母が面影 むらさきは手て絡がなりしや 昨夜よ父へとい
さかひ給ひき 手に温ぬむ粽剥きつつ あやしくも頬ほをほてらせ 童我こよなく羞ぢける 遙とほかなりけり この島の院いんに盲くらひ
て頂たかく 不自由慰問の 餅もちの匂におひ葉剥きつつ憶おもへば

剥むくからに柏かしわの餅もちの香かほに匂におふ頬ほ赤あか童たかのこの日ひかの日ひは

結むすぶ髪かみのさやけき母ははを童たかわが見みつつひさおかにたのしかりしも

いまだきに生おひし白しろ髪かみを染ぞめ給たまふある日ひさびしき母ははを見みにけり

湯浴ゆする母ははが乳房ちちうに黄わばみたる皺しわのたるびのまざまざと見みゆ

彼

今いまにしておもへば彼かれぞ癩かなりし童たかのわれと机を並ならめしが

彼かれの指ゆびに癒なえては破やれし傷や一つ今いまにして且かつつ眼まなこにはうかみ来く

わが病あるひは彼に受けたらむ童わらわの日のしかも親しき

我疫わがえやみの日にこそ受けたらめふるさとの吾子よ病むな伝染うつるな

わが病むも彼ゆゑにかも思ひでて或は疎みあるひはいたむ

清書

送り来し吾子が清書は見えわかね相逢あひまふがにも涙のにじむ

母を訪はむ春の休暇を待ちわぶる吾子の童の文は聞きをり

相会ひて妻子二人のむつむ日をたくらがりの臥床ふしどに思うふ

夜の夢に笑まひて消えし眼差まなざしの思ひを去らず寒き日すがら

小春日

帰省する友を送りて

偶々たまたまに秋の日なかを降りたてば眼にはうつらね空のはるけさ

帰省する人を見送る砂丘に昼を鳴きつづこほろぎのひとつ

この浦をかくて往きにし幾人の遂に還らずをの誰彼は

家なりし噴井の音はわすれつつこの島にして命をはらむ

発動船の音遠ざかる砂丘の秋日のぬくみ肩さきにしむ

大掃除

大掃除を避よけて籠らふ火葬場の昼をしづかにうぐひすの鳴く

大掃除の縁に汲むなる茶のはしら家なりし日斯かがるもありき

おほ掃除すみてひろらにわが室の畳の上を風の吹きぬく

畳替

話好きなる豊師の翁も病者の一人なり

豊師の悔くやむともなく言いひつるは惜あはしみなくすてし薬料のこと

ふるさとの海にゆたけき漁を言いふこれの翁は酒の好きとか

弟子などは手足まとひと膠にかもなき老の訛あやりもその人ならし

言いひ据たゑしおのづからなる訛あやすら職しやくに老おいたる頑かたくなの好き

ながからむ世よすぎの料しやくに習しひてしその職しやくに居いて島しまになじむか

癩かに住すむ島しまに盲めひて秋あき一日いちにち替かへしたたみをあたらしと嗅かぐ

ともしくも残のこる月日げつじつかはぎ替かへし今日の豊とよのにほひ身みに沁しみむ

豊とよかへすみてはめこむ紙襖しすわ友ともははげしき夕映ゆふえいを言いう

清すがしろにほへる部屋へやの壁かべぞひに白しろき茵いんをのべて長ながまる

杖

潮音

医官内田守博士は守人と号し、水瓶社同人として歌路にも練達の人、公務の傍ら寸暇を惜しみて療養短歌の普及に尽瘁せらる

時ありて言ことにもたがひ癩者我癩を忘れて君にしたしむ

衰へし命のはてはこの大人うしに頼より縋りつつ安らがむとす

菊

医官小川正子先生病む

この島の医官が君の少女なす語りごところ親しかりしを

かりそめに病み給ふにも秋のはやさ庭の菊は香には寂びつつ

南京陥落

日支事変に職員看護婦など相つぎて出征す

世は今し力を措^おきて事は莫しますらを君を往けと言祝^{ことほ}ぐ

顧みて惧れなげなくに盲我戦況ニュースをむさぼり聴きつつ

南京落城祝賀行進の日取りのびて固くなりたる饅頭をいただく

島にも防空演習の行はれて

鳴りいづるサイレンに次ぐ非常喇叭^{その}やがて外面^もに足音さわぐ

秋逝く

あたらしき足袋のこはぜはかけがてぬ窓^もさきに来て百舌^もの高鳴く

秋ふかき昼のひそけさ膝にくる猫にむかひて物言ひかけぬ

膝に来て眠る仔猫のぬくもりのそこはかとなき雨の降りつく

さ夜ふかく目醒めてをればさしなみの隣の人の欠伸するこゑ

仔の牛がバケツなりしを飲みほして配給の乳今日は来らず

幾年をかくてありけり言わが起き臥す窓のすずめ子のこゑ

曆

疾む腹は暫し間のあり更くる夜の玻璃戸に凍みて雨の降りつく

疾む腹は撫であぐみつつ俯伏して或は宵の秋刀魚さんまを憎む

足袋のまま眠るならひをこの夜は寝返る度に思ひかかはる

やがて薄らぐいたみに、童の日の子などとりとめもまく思ひいでては

三りんぼう一天上壁の上のこよみは奇あやし生きもののごと

きのへ子ねの宵の炬燵の物語り父のあぐらの酒の香に聞く

霜

年ごとのおとろへはあり片寄りによれる敷布を展べつつ思ふ

黒き蛇飛びかかるとき目醒めたり深夜を乾からぶ痰に咽せつつ

夜すがらを脊柱の冷え夢に入りうつうつと聞く一時二時三時

親しきが一人一人に失うせゆきて今はこの身の待たるごとし

風邪ひかば息塞るとふ喉の腫れに夜毎をしみて冴えのまさり来く

灯

山田信吉君は琉球の人、我為に眼とも手ともなりて衣食の子とはもとより煩瑣なる草稿の整理まで一手に弁じたりしを、
かりそめの病に急逝す

隣室にもの音のする夕暮れを昼餉のすまひもじさに居り

今朝は我に箸も添へしを君が往きし重病室に灯ともる頃か

x

病室に君危篤なり午前二時人みな往きてあとのひそけさ

くらがりの褥しとねに膝をただしつづ君が命をひたすらに禱のむ

x

夕暮の臥床に聞けば君を焼く火葬場にたつ讚美歌のこゑ

春はやき蚊の声ありて信吉の灰となりゆくこの夜は深む

遺されし机の板の冷たみにに頬をあてつつ涙のごはず

この秋は帰省して母を見むと言ひゐたりしを

身に著けて帰るべかりしその衣きぬは遺骨つぼの壺つぼに添へて送らむ

杖

事ともなく往き来なしけるこの道も杖の先には搜りわずらふ

搜り行く路は空地にひらけたりこのひろがりの杖にあまるも

泥濘ぬかるみに吸はれし沓くつをかきさぐる盲めしひにこそはなり果てにけれ

杖さきにかかぐりあゆむ我姿見すまじきかも母にも妻にも

さぐりゆく裏山路あけの暁あけの空晴れたるらしもさへづりの澄む

x

杖立てて佇みをればしたしさよ誰彼の声の言ひかけて行く

声かけて傍へを過ぐる足音の一人一人をおもかげに繰る

路べりに杖を立てつつ朝まだき入江にはやき爆音をお趁おふ

ひとしきり葦生をわたる朝あらし眼を瞠りつつ聴きとめにけり

夢

人なかに行きあひし父を夢ながらなほざりに見て思ひにのこる
命はも淋しかりけり現うつしくは見がてぬ妻と夢にあらそふ

草餅

愛国婦人会岡山支部より草餅を贈られる

春なればよもぎの餅も食たうべよと添こへて賜はる言ことのよろしき
霞たつ吉備きびの春野の若よもぎおよび染めつつ摘ませけらしも

音

声

ヘレン・ケラア女史の放送を聴く

放送のこの人の声を島の院に盲^しひつつ聴けばなみだし流る

我が手足の麻痺症状のすでに久しきを思ひつつ

この語る声も言葉も悉く皮膚より得てしその皮膚のよさ

前栽

盲^{めし}ひてはおのれが手にはつくらねど庭のトマトの伸びをたのしむ

隅々^{たてまつ}を訪ひ来し声は前栽の伸びのよろしきを言う

盲^{こや}わが臥りてをれば庭さきのトマトを盗む足おとのあり

音

読書きに借らむ人手をおもひつつ縁に夕づく物音を聴く

盲^めひてはもののもしく隣家に釘打つ音ををはるまで聞く

行きすぎる足音幾つ我家をめぐりて夕べのどよめきに入る

いささかの嘔^{はき}気去りやらぬ午さがり隣のラヂオ静かに鳴りつく

窓先に足音の来て夕まぐれ木草の立^{たち}に水そそぎをり

朝たけし室のかそけき手搜りに窓をひらけばまた音もなし

歌

夜すがら案じあぐめる歌ひとつ思ひにはあり朝粥の間も

息の緒のよりて甲斐ある一ふしの豈^めなからめや盲^めひたりとも

葦の葉を捲^ひきて鳴らして朝明は一生^{ひとよ}にきはまる命おもはず

白粥

夏立つや夕べをはやき麻あさかぢの去年こぞのにほいにしみて転ころ仰が臥す
ときをりを枕辺に来る蚊のこゑの一つ二つの打ちかねてけり

路樹

立ち出でて路樹四五本のそぞろゆき厚しと言ひつつ我の息づく
伴れられてあゆむ木陰は肩さきに照り翳りつつ朝の日暑し
坂路を登りつめしも大儀さよ潰えし咽喉いは呼吸きに鳴りつつ

乙島

おほらかに羽根鳴らしつつ乙鳥おひく露つぐもる朝の窓を出て入る
電灯の紐のあたりのつばくらめ忘れてあれば鳴き交しけり

読む声のかつもつれつつ暫しらくのけはひは友野居睡しまれるらし
つばくらめ一羽のこりて昼深し畳におつる糞まりのけはひも

水鶏

隣室の友逝く。母なる人球を聞きて郷里より来訪せらる。

壁越しの嫗が声は亡きあとの室を訪ひきて嘆かふらしも

たらちねの母なりければ島の院に死なせし命の短きを言ふ

おのが身の悼まるるがに亡き友が母なる人の挨拶を受けぬ

畑たつくり巧みなりしよ遺されしトマトの畠たに佇ちつもおもふ

初七日の日隣室にてささやかなる回向をいとなむ

南無大師遍照金剛の絵すがたに友が俗名を添へて灯ともす

梅雨ばれの夕べをながき読経どきやうのこ糸襖はづせる縁にゐて聞く

おのおのに菓子すこし貰ひ帰りゆき十七日のことははてたり

事はてて帰る甲者の足音に義足のきしみのありはて遠のく

初七日の友が供物くもつの枇杷の実をむきつつをれば水鶏くひな鳴きつく

荒ましき起居たちあなりしもこの夜をば厠にもたたず咳せききもせず

白粥

衰へし腸のいたみに ひさしくも頂く白粥 医局よりの許可伝票 炊事場に届けば この島の飯の器の 飯盒の蓋に盛れる
を 舎の人の交るがはるに 運び下さる幾年の 雨の日は雫滴り 風の日は散りこむ活の葉 時にうすく或は固く かにか
くに甘うまからねども げに幾人の煩ひに 頂く粥ぞこの白粥は

反歌

飯盒の蓋に冷えたる白粥のうすきにほひに明し暮すも

足音

足音は外の面をゆき過ぎ 付添の友は帰らず 五時の鳴りやがて六時の
ラヂオなる唱歌は歌へど 盲ひ我が夕餉のすまぬ
ひもじさに思ふともなき 遠き日の妻が怨言 わが晩き帰りを言ひき 枇杷の果の窓にあらむ 共棲は短かりしよ
癒えてこそ帰るべかりし その後の二年三とせの いつしかも十年にあまる 今はもよ 生きて見るべき我とは待たじ

送別

隣室に年久しく住み合わせたる松岡茂美君の帰省を送る

まづ一つを我が手にとらす饅頭のささやまにして君を送るか

この島の骨堂にして再びを逢はなむと言ふたはむれならず

防空演習の警笛ひびく朝の縁にまた会ひがてぬ人と別れぬ

乳臭

あやされて笑ふ声音も乳の香もこの島にして児のめでたき

片言のこゑの清^{すが}しさかたみ我抱^{すが}きねと言はれて児^こをおそれぬ
ありし日の吾児がおもみの覚はゆるこの片言ぞ乳の香にしむ

帰雁

わが骨の帰るべき日を嘆くらむ妻子等をおもふ夕風ひととき

春ならば襖ひらきて通夜の座に白木蓮^{はくれん}しづく闇を添ふべし

その夕^{よひ}の老松原の塚つかくとどろとどろに神もはたたけ

秋ならば庭の葡萄の一房のむらさきたかき香を供養せよ

冬ならば氷雨^{ひさめ}もそそげ風も鳴れ冷たく暗き土に還らむ

春至らば墓の上なる名なし草むらさき淡き花を抽^ぬくべし

秋まひる犬えびづるの実の白みつぶらつぶらに子等を唆るや

曼珠沙華くされはてては雨みぞれそのをりふしの羽かぜ囀り

気管切開

異常注射

夜中異常あれば看護手出張して応急の手当てをなす。之を異常注射とよぶ。或夜激しく胃の痛むことありて、二度までも当直の看護手を煩はす

胃袋の疼^{いた}みのやめば胸の頭^づの諸々のいたみなべて収まる

身体ぢゆう何処にも残る疼みなく此夜の明を眠たくなりきぬ

麻痺

癩の兆候は麻痺なり。四肢のさきよりひろがる知覚麻痺に、針にて刺すも火にて焼くも更に痛みを覚えす。次第に暮れば全身の皮膚粘膜を犯し、遂には、舌咽喉眼球にも及ぶ。癩の最後の症状も亦麻痺なり

朝醒めて指に見つけし火ぶくれの大きからぬは憎からなくに

痂かさぶたの剥はがれしあとに具かはりて指紋あや文なすこのいみじさを

朝明あかをもよほす悪寒あかんにたづぬれば人差指ひとさしに爪つめぞ失うせたる

いつしかも脱ぬ失けせてける生爪なまづめに嘗なむればやさし指ゆびの円まみは

指ゆびより肘ひじにひろがる火あぶくれの己おのがこの手てぞゆゆしかりける

x

耳みみの孔あなさぐらるときともしくもここに残りて痛覚いたしはあり

しろがねの針はりをたつればしかすがに眼まなこの玉たまに潜ひそむ痛いたみは厳こし

鼻

鼻翼はな萎しえて年とし久ひさしく通とずることのなかりしが、たまたま人に教おしへられて紙卷しまき煙草えんそうの吸口すいこうを挿さむに、片方ひとへは潰つぶえつくして用もちをなさざれど、残のこる一つは幸さいに氣息いきを通とず

挿す管の鼻よりかよふ息の根のこのめでたさは幾年ぶりぞ

おのづから出で入る息の安けさや鼻に挿したる管は鳴るとも

鼻ありて花より呼吸のかよふこそこよなき幸さちの一つなるらし

されど、もともと身に具はるものならねば

息づけば鼻に挿したる紙筒のかすかに鳴りて眠りがたしも

喉

病は喉頭に及び声の唄れてより年余、この頃に至りてやうやく呼吸困難を加へ、深夜の乾気に咽せては屢々氣息を絶つ

起き出でて漱ぎしはぶく真夜の縁隣の室に心を置きつつ

幾たりのかたみを悶え死なしめし喉つまの塞りの今ぞ我を襲ふ

辛くして吸ふなる息を咳きに咳くこのひとときぞ命がけなる

総身の毛穴血しぶき諸の眼のはじけ果つべししかも咳きに咳く

折から防空演習中なりければ

警笛は夜天に鳴れど鳴り歇めどい這ひ転伏しわが喘ぎ咳く

根かぎり咳きしはぶけど乾びたる痰のねばりよ喉をはなれず

刻々にけしきを変ふる死魔の眼と咳き喘ぎつつひた向ひをり

人皆の眠りひそまる夜の底になにの因果をわが咳きやまぬ

二十億の他人の息のかよふともただる喉にわが息は熄む

咳く咳を悶搔きつくして横たはるこのひとときの黙の虚しさ

夜一夜を咳きて明せばうつうつと昼はひねもす空腹きなさぬ

うつうつと眠るともなき日の暮を母が声のす夢としもなく

夜毎四度五度を起き出でてしはぶき漱ぐにもなれつつ

含み鳴く夜鳥の声のかそけさを咳き咽びつつ聞きとめてをり

さやかにはえ鳴かざりけり夜の冴えに声をふふむは何の鳥かも

夜な夜なを漱ぐならひの縁先に虫の鳴く音はともしくなりぬ

辛くして息の根通ふ喉の孔に沁みて夜寒は冴えまさりつつ

癒ゆるなきただれなりとか息づまる喉鳴らしつつ深夜を寝ねず

なりゆかむ果は思はず吸ふ息の安らふ暫しを眠らむとすも

この冬はこの冬はとをおそれつつかそけき命を護り来にけり

朝

明六つの鐘は鳴りいで から風の一夜は明けぬ 起出でて何とはなけれ
息づまる喉のただれに 咳き喘ぎ寝ずて明せば
健かに人のとよもす 朝音は宜しも

入室

気管切開のために重病室に入る

載せられて担架に出で来にわが室をめぐるけはひは聞きのこしつつ

病室の扉口とくちと思ふおもりに額にせまる石壁の冷え

今日よりのこの六尺のわが天地寝台のくぼみにそひて長まる

這入り来てひた咳きに咳くひとしきり此室の気の我にはえくさ

臥ねてをれば片面にあかる窓の下に迫れる海は今日をひそまる

大阪にて育てりといふ十あまりなる少年、肺結核を併発してすでに声も嘎れぬたりしが、入園以来月余をこの病室にて送りて、とある夜をひそかにみまか斃る

しまらくを足音あのとはみだれ亡骸なきがらの運び去られてまた音もなし

わが眼には灰白みつつ遣されし寝台べつどに今朝の日はあたるらし

明暮を隣寝台にも食ひし童吾一は昨夜を先立つ

気管切開

高々と手術の台に置かれたり噴く湯けむりの音のもなかを

気管切開はじまらむとす手術台まぐらふ人の黙し暫し

気管切開てふ生きの命のうつろひを見つめては居り怖れもしつつ

切割や気管に肺に吹き入りて大気の冷えは香料のごとし

幾夜を喘ぎあかして気管切開をはれる台に眠気さし来ぬ

このままにただねむりたし呼吸管いで入る息に足らふ命は

また更に生きつがむとす盲我くづれし喉を今日は穿ちて

喉穿りて横たはる世の素硝子の窓にはらぐ霞ひとしきり

うつうつと眠りつ醒めつ夜もすがら附添ふ人の身じろぎを聞く

呼吸管かよふ息音は身にしみて幽けくもあれや深夜^{ふかよ}冴えつつ

まともなる息はかよはぬ明暮を命は悲し死にたくもなし

父なる我は

子も妻も家に置きすて 天刑の疫^{えやみ}に暮るる 幾とせを くづれゆく身体髪膚に 声あげて笑ふ日もなく いつはなき熱のみ
だれに 疼きては眼をもぬき棄て 穿てども喉のただれの 募りては呼吸^{いいき}も絶えつつ 死しはあへぬ業^{ごふく}苦の明暮 幾人あり
て狂へり 誰れ彼は縊れもはてぬ ながらへて人ともあらず 死に失せて惜しまるるなき うつそみの果てにしあれど あ
が父の今か帰ると そが母も共に待つらむ 吾家なる子等をおもへば 壊^くえし眼の闇もものは 世にありて人の測らぬ
歎^{なげ}きをもなげかむ 懼れをも散ておそれむ 天国はげに高くとも 地獄こそまのあたりなれ 次ぐ夜の涯は知らねど 副^たふ
魂^{たま}のかぎり^は往かむ父なる我は

朔

おほかたは命のはての歌びみの稿を了へたり霜月の朔

かたゐ我三十七年をながらへぬ三十七年の久しくもありし

単なる空想の飛躍でなく、まして感傷の横流でなく、刹那をむすぶ永遠、仮象をつらぬく真実を覚めて、直観によって現実を透視し、主観によって再構成し、之を短歌形式に表現する。日本人同人の唱へるポエジイ短歌論を斯く解してこの部の歌に試みた。

その成果はともかく、一種一種の作歌家庭に於いて、より深く己が本然の相に触れ得たことに、私はひそかな喜びを感じている。

夜

夜な夜なを夢に入りくる花苑の花さはにありてことごとく白し

更くる夜のおそれを白く先ひらき夢にはさむき花甕を巻きぬ

ひとしきり灯ともしのをりに露をよぶ黒松属のこゑをおそるる

かたはらに白きけものの睡る夜の夢に入り来てしら萩みだる

風の夜のまことしやかな暗がりを声ばかりなる賑はひのゆく

己が吹く笛の音いろをうとみつつこの夜の更に聞く声の莫なさ

この夜をば我夜とたのむ灯を掲げ絶えてひさしきもの言ひもしつ

脈鳴りの絶えつつねむる幾いくよる夜を闇にめぐり遭ふ足音もなし

天

大空の蒼ひとしきり澄みまさりわれは愚かしき異変をおもふ

蒼空の澄みきはまれる昼日なか光れ光れと玻璃戸をみがく

蒼空のこんなにあをい倅をみんな跣足で跳びだせ跳びだせ

搔き剥がしかきはがすなるわが空のつひにひるまぬ蒼を悲しむ

涯もなき青空をおほふはてもなき闇がりを彫えりて星々の棲む

ひとしきり物音絶ゆるの簷のきをめぐり向日葵を驕くまらす空の黝くろむ

斜面

ある朝を白む日暈はひとしきり顛頂めがけて麦笛を吹く

ひたぶるに若き果肉をかがやかす赤茄子畠にやすらひがたし

飛びこめば青き斜面は消え失せてま下にひろがる屋根のなき街

蝉の声まつただなかを目醒むれば壁も畳もなまなまと赤し

わたる日のくるめき墮ちし簷ふかく青き毒魚をむしりて喰ふ

白き手の被害妄想をのがれくる空にまつ黄なる花々尖る

円心の一点しろく盲ひつつ狂はむとするいのちたもてり

狙ひよる蛇の眼もなく斬りかかる狂人もなくダリア赤し

色あをき果肉の肌にうもれつつ世にあきれたる夢は見てゐき

銃口の楊羽蝶はつひに眼じろがずまひるの邪心しなしたじろぐ

赤茄子の落つる日なかをうつつと海魚の肌の変色は見ぬ

無花果の饅いぢじくえて落ちたる夕まぐれかるときを我なにと言ひけむ

まのあたり向ひの坂を這い上がる日あしの赤さのがれられはせぬ

紙襖はちひて高き蚊帳をつり生れ来し火をやすらがむとす

こもり沼ぬのまひるの陰くもりひとこゑを鳴きてやみしは何の声とか

海鳥のこゑあらしおもひでの杏とほきに触るる朝のひととき

かたくなに忿りを孕むけだものの赤みだつ眼を匆ねかへしをり

昼も夜も慧さかしくひらく耳の孔ふたる完き不運にゐるも

いつしかと我に似かよふ木の椅子の今朝はふてぶてと我を見据ゑぬ

脱けおちて木の果みは白し音もなし照る日の光立ちわたりつつ

身がはりの石くれ一つ投げおとし真昼のうつつきりぎしを離る

寂

ひとしきりもりあがりくる雷雲のこのしづけさを肯^{うへな}はむとす

いつの世のねむりにかよふたまゆらかまひるしづかに雷雲崩る

星宿

星の座を指にかざせばそこに散られる譜のみな鳴り交す

昨日こそ我の過來しかの空に今宵光るはなにの星かも

まなぶたに夜空の星を塗りこめて吐きかへしをれば夢うつくしき

背ばしらをさかのぼりくる眼を放ち空の杳きに神々を彫る

星の夜のこの大空を虹色にわが吐く息は尾を曳きてあれ

砌

あらぬ世に生れあはせて今日をみる砌みきりの石は雨にそばてり

日はあがり月はかたむく世の隅に昨日の襜褕ちんごを身にひき纏ふ

もの音の絶えてしまひし日のさかり壁にむかひて我のねむりぬ

竹林にひとつの石をめぐりつつ言ふこともなきしばしなりけり

床したに鼠のかじるもの音も昼のおもひは悔くしきに似つ

夕づけばしづむ遠樹の蝉の声なにもかもしつくして死にゆくはよけむ

天国も地獄も見えぬ日のひかり顛頂をぬらして水よりも蒼し

青草に來りやはらくひとときも何処いずにか真紅の花々は咲け

われの眼のつひに見るなき世はありて昼のもなかを白萩の散る

息の緒の冷えゆく夜なりまどろみつすでに地獄を墮ちゆくひととき

いつしんに耳をすましてあきたらぬ頭蓋の奥をぬすみみんとす

室々に背をむけてゐる影いくる夜の敵意はいつかな熄まず

かざりなき命を聞けばあなかしこ靈魂てふに化けむはいつぞ

愛執^{あいしゆ}は海に消えせぬ翳となり三半規管鳴りひそまりぬ（解剖室）

失せし眼にひらく夜明けの夢を刷き千草^{あや}の文を雨あしの往く

軌跡

シルレア紀の地層は杳きそのかみを海の蠍^{さそり}の我も棲みけむ

路々にむらがる銀の月夜茸蹴ちらせばどつと血しぶきぞたつ

コロンブスがアメリカを見たのはこんな日か掌をうつ蒼い太陽

引力にゆがむ光の理論など真赤なうそなる地の上に住めり

ひたすらに白きおそれをかき抱く母鳥の眼を今日ぞ見ひらく

いつの世の魚貝の夢かをりにまだらに青き殻をあらはす

降りつもる落葉のこゑにうづもれて翅あに生れむ夢は見てゐき

あたりにて間なく合図をするものあり樹をも揺ゆりぬ掌てをもひろげぬ

奈落

明暮れをあだにおろかに思はねど屍となる身ぞ臭ふなる

今日も暮れて五臓六腑はとりどりに音なき夢を積みくづしする

この空にいかなる太陽のかがやかばわが眼にひらく花々ならむ

空の青に眼まなこを凝らすなたひにも見放されつつ夜ごと眠りぬ

背も腹も褪せつくしたる翳ひとつ昼にも夜にも逐ひたてらるる

抽斗なるむかしの銭も臍の緒も我にきはまる幾夜の命ぞ

靈魂に遣らむ臍のありかなど皺くちやな頭にかんがへあぐむ

しあはせな歌はおもへど目に見えて夜毎を地獄に墮つる夢ばかり

不運にも置去られつつ眼のたまに鍼などたてて明し暮すか

こんなとき気がふれるのか蒼き空の鳴をひそめし真昼間の底

錆

いづくにか日の照れるらし暗がりの枕にかよふ管弦のこゑ

起きいでて手さぐる間にひとしきり三十二相の眼鼻あらたか

つとりくる如法の間にまみれつつ身よりくされし錆搔きむしる

霧も灯も青くよごれてまた一人我より不運なやつが生れぬ

起きいでて厨にさむき水をのむ深夜のおもひ飢うるがごとく

ふうてんくるだつそのやくらいの染色体わが眼の闇をむげに彩る

総身の毛穴を襲ふ窒息をもなかに醒めて鳴をひそめぬ

目醒むればいつも一時の鳴ってゐるそんな夜更をまたも醒め来ぬ

冴

夜一夜に壁の羽虫を刷きおとし地平きびしくむき直り来ぬ

額を搏つ晨氣高らかに星々をかなぐりすてし空に居むかふ

石に凍み音ねいろはあれど今朝の朝の訝は須由に鳴りかはし熄やむ

山なみを押ししかたむけて迫り来る空のふかきに吸ひあげらるる

あはがなく虚空の距離をいただきて野鳥のあそびつひにおごらず

巷

ある朝の白き帽子をかたむけて夢に見しれる街々を行く

踏む聲がまばゆくてならぬ巷には夜霧のにぎりあとかたもなく

あるときは思はぬ窓に日のさして青む大気の街迷ひ行く

窓ごとに黄金のロマンは灯りつつ迷児われにほほゑみかけぬ

あらはなる轍のあとをあゆみつつ許さるまじき悔となりきぬ

人ごみにおしつおされつなにがなしに臍のある身が儂まれける

まんまんと湛ふる朝の此処かしこ白くにごして娑婆がこゑあぐ

足音の絶えし巷に目醒むればかぎりなき花々闇にひそまる

捧げゆくうすきグラスにしたたらずある日の微笑ある夕の嘘

臍のある腹をつつみて今日も往き人だかりには爪だちて見つ

あらむ世を商売の類に生まれきて色うつくしき酒は鬻がむ

煙突ありあがる煙ありめぐる日にみじかき翳を地におとせり

年輪

刈られたる根株に白き年輪は脂をふきつつ枯れゆくらしも

かたつむりあとを絶ちたり篋の午前十時のひかりは縞に

わが指の頂にきて金花虫のけはひはやがて羽根ひらきたり

うつらうつら真昼をとざす暗がりに間なく滴つ樹脂の香を聞く

暮れあをむ空に見えくる星一つさし伸ぶる手に著きてまた一つ

とある世のしづけさ深くしみ入りて髓に埋もれしかなしみを整^さす

暗がりに撒きちらさるる白き餌をたはむれならず啄みあさる

かさかさと爪鳴らしつつ夜もすがら畳にみだるる花びらを摘む

昨夜の雨の土のゆるみを萌えいでで犯すなき青芽の貪婪は光る

傷つける指をまもりてねむる夜を遥かなる湖^{うみ}に魚群死にゆく

ある朝け五層の天守は焼けおちて池心にねむる白^{はく}華一輪

臍^{らう}たけく竹の節より生まれ来しむかしのいつはりのよさ

いつめんの枯木に花を咲かせつついつの夜までを我の夢見し

昼

海ぞこのかがやくばかり銀の銭ばら撒きをれば春のまひるなれ

みなそこに小魚は疾し全身の棘ことごとく抜け去る暫し

白き猫空に吸はれて野はいちめん夢に眺めしうすら日の照り

薔薇苑の薔薇ことごとく黝くろみてまひるの空にをはる夢なる

薔薇ひらき揚あ羽げ蝶はみだるる日のまひる一碧の空はわが明をおほふ

遅日

あかつきの夢に萌えくる齒朶わらび白き卵は我を怖れぬ

黒き猫黄なる猫などたはれつつ小雨すぎたる庭暮れむとす

人参の黄なる肌のものうさかときのまのわが想ひを覗く

ちひさなる抽斗ひきたしあまたぬき並べあれやこれやに思ひかかはる

暁

しんしんと梧桐あをぎりの幹をさかのぼるしづけさありて夜気はしりぞく

うつくしき夢は見かねてあかつきの星の流れにまなこうるほす

うるこ雲高くうすれてある朝の果肉は白し齒にきしみつつ

思ひきり不敵な夜々をたくらめど星の失せては空の青み来く

あかつきの窗をひらければ六月の白い花びらが手のひらに降る

そら鳴るは白楊ならしあたらしき季節に吹かれてこよなく眠る

地の底の黄なるころもを脱けいでて翅はにひらく感覚を践ふむ

翳

おちきたる夜鳥のこゑの遙けさの青々ところ犯されゐたれ

こともなき真昼を影の駆けめぐり青葉のみだれはいづこにはてむ

腸のあたりうすきいたみのをりをりに昼ひとしきり若葉は募る

ひねもすを青葉のてりにきほひつつくたくたになる慾念なるも

水底みなそこに木洩れ日とほるしづけさを何の邪心かとめどもあらぬ

轉りの声々すでに刺すごとく森には森のゐたたまれなさ

まのあたり山蚕やまごの腹を透かしつつあるひは古き謀反むほんをおもふ

てり帰る昼をこゑなき木下路脱けいづるとき日は額ぬかを搏てり

たそがるる青葉若葉にいざなはれ何に墮ちゆくこの身なるべき

頤おとがひにうすき刃の触るとき何時の葉ずれかうつつを去らぬ

おのずらからもの音絶えゆく窖あなにりにある日若葉のほひときめく

夜をこめてかつ萌えさかる野の上につめんの星はじめて飛びぬ

新緑の夜をしらじらとしびれつつひとりこよなき血を滴らす

聡^{さか}しかる星のたむろをのがれきて若葉のみだれ涯なきをあゆむ

暗すまの壁にむかひて明暮を^{とのも}外面にきはふ青葉は知らず

簷^{のき}をめぐる青葉若葉にうづもれて今朝は真白なるベーチを披く

うづたかき簷の青葉を揺すぶつて覗見すれば巷に日の照る



跋

私が歌を習ひはじめたのは昭和九年頃で、当時視力はもう大分衰へてゐたが注釈を頼りに万葉集などに読み耽つた。園内には長島短歌会と云ふ同行者の団体があつて、之によつて作歌の便宜を刺激とを受けたことが少なくない。昭和十年一月水瓶に入社させて頂き、く八月日本歌人に転じた。この頃には全く明を失つて読むのみも書くのにも人手を借りなければならなかつた。

此の間、日本歌人の前川佐美雄氏は癩者の私を人間として認めて呉れたのみならず、何時も励みまして下さつた温かい御気持には感謝の言葉もない。

第一部白描は癩者としての生活感情を有りの儘に歌つたものである。けれど私の歌心はまだ何か物足りないものを感じてゐた。あらゆる仮装をかなぐり捨てて赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させたい、こついふ気持から生まれたものが第二部翳で、概ね日本歌人誌に発表したものである。が、仔細に見れば此処にも現実の生活の翳が射してゐることは否むべくもない。この二つの行き方は所詮一に帰すべきものなのであらうが、私の未熟さまだ其処に至つてゐない。第一部第二部共に昭和十二年乃至十三年の作で、中には回想に拠つたものも少なくないが、西郷さんの銅像の紙礫も縊れた病友の袷の縞目も、私にとつては今朝の粥の味よりも鮮やかな現実である。

この週の草稿の整理は、気管切開の手術を受けた前後を通じてなされたので意に満たない点が少なくなり、今は健康が許さないので満身創痍の儘世に送るの他はない。

本書は下村海南、山本実彦、両大人の御厚意で、本園々長光田健輔、医官内田守人両先生の御尽力によつて、世に出るこゝとなつたもので、茲に謹んで謝意を表す次第である。また、目の見えない上に声の出ない私を扶けて、煩瑣な草稿の整理に当たつて呉れた病友、小田武夫、春日英朗、山口義郎三君の労苦にも深く御礼申上げる。

此の小文でもつと詳細に私の周囲を紹介したいと思つたが、既にその労に堪へないので、常に傍にあつて私の心身両面に肉親に慈みの眼をもつて護つて下さる内田国手に、跋文を御願ひして補つて頂くことにした。

では歌集白描を送る。この一巻が救癩運動の上に、また我々癩者の生活の上に何等かの意義を持ち得るなら、それは望外の幸せである。

昭和十四年一月 長島愛生園にて

明石海人

底本：「歌集 白描」改造社

1939（昭和14）年2月23日初版発行

「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧漢字を新漢字にあらためました。

入力：金井和光

修正：蔣龍

2012年2月21日作成